不定期刊行　　第405号　2011.08.28

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者　大西　浩
池田工業高等学校

ヤズィックアグルの蒼い空　1

多くの皆様のご支援をいただき、未踏峰ヤズィックアグルに登頂し、8月20日無事に帰国することができました。この計画が実現するまでには、いくつもの難関がありました。改めて感謝を申し上げます。しばらくお付き合い下さい。まずは、全体の報告から･･･。

最高の夢の舞台

そもそもこの計画が出てきたのは 3 年前の2009年の1月のこと。たまたま日本に来ていたヌルマイマイティさん（元新疆登山協会職員：以下ヌルさん）を信高山岳会の総会に招いたのがきっかけだ。その折、会の30周年を目途に、その時紹介されたこの山の登山を、私が中心となって進めるということが決定された。

さっそく準備にはいり、早速2009年に偵察を計画したが、出発を半月後に控えた 2009 年 7 月6日に新疆では大規模な民族対立が発生、急遽訪中を断念せざるを得なかった。さらに2010年には新疆に入ることはできたものの、アプローチの新蔵公路が大雨の影響であちこちで決壊し、BC 予定地の170kmほど手前で足止めになり、偵察はおろか目的の山を目にすることもないまま帰国することとなる。しかし、そのことは一方で、夢を持ち続けることが、夢を実現するための最も重要な条件であるということを裏付けることともなった。

紆余曲折はあったが、最終的に隊は会長の松田大を隊長とし、会の中からは久根、大西の2名が、会の外からもかつての教え子でもあり趣旨を理解・共有していただける2隊員（山内、三戸呂）を補強、後援団体である信濃毎日新聞社からも、記者派遣をしていただき（佐藤）、6名で実施することとなった。こうして準備万端、計画もすべて整った4月初旬、昨年通行止めとなった新蔵公路の全面改修工事による立ち入り日の制限というまたしても予期せぬニュースが届き、タクティクスの全面的な見直しを迫られるなど、最後まで振り回された末の新疆入りとなった。

さて、登山隊は6月初旬には隊荷を発送し、7月16日に日本を出発。ウルムチを経て入ったカシュガルで食糧調達などの最終準備を行なった。21日にカルギリクから新蔵公路へと車を進め、22 日には待望の BC（4530m）に入ることができた。翌日から早速登山活動を開始、ポーターを使った ABC（5030m）への荷上げが完了して全員で ABC 入るはずの前日の25日、山内に高山病が疑われる症状が現れた。一番近い病院まで500km、そこに行き着くまでに5000m近い峠を二つ越えねばならないというロケーション、隊付きドクターの不在など総合的な判断から、山内の登山続行は危険であると判断、荷上げを終えて帰るポーターとともに山を去るという結論を出さざるを得なかったのは大変残念なことだった。

結果、ここからは、5 人での活動となったが、登山のキーとなったのは荷上げとそれを可能にするC1への登路の確保、頂上直下の雪壁の突破であった。26 日 ABC 上部偵察隊が氷河末端のセラック帯を回避し、氷河の脇を詰め、5400mの地点でヤズィックアグル南氷河に乗り、そこから南東氷河との合流点まで進み、C1（5620m）の目処を立てたのは最初の大きな成果であった。そして、27、28、29 日の３日間でC1への荷上げを完了。休養をはさみ、31 日にはC1入りし、その日のうちに本峰の南東面に回り込み、南東氷河の急斜面に荷上げのためにフィックスドロープを6本のばして荷上げ路を確保した。翌8月1日には、荷上げを並行しながら5900mのプラトーまで、フィックスドロープをさらに5本のばし、クレバス帯の続く広大な氷河を詰め、C2（6060m）までの荷上げを完了することができた。ここまで来ると頂上はすぐ目と鼻の先に見え、ようやく登頂の二文字が現実のものとして実感できるようになってきた。

隊　員　名　簿		
隊務	氏　　名	所属
隊長	松田　　大	信高山岳会
秘書長・登攀隊長	大西　　浩	信高山岳会
輸送梱包・医療	久根　　敏	信高山岳会
装備	山内　一成	大町山の会
報道・気象	佐藤　　勝	信濃毎日新聞社
食糧・環境	三戸呂拓也	炉辺会

これまで29日に氷河上で雪が降ったほかは、概ね天候が安定しており、順調にルートが延ばすことができた。隊員の中には高所順応でやや苦労している隊員がいるものの、それは想定の範囲であり「慢々」で動くことと、お互いに口に出し合いフォローするというルールを徹底して乗りこえていった。タクティクスではこのあと順応のための C2 往復ということを考えていたが、隊員の状況、天候の予想（GDM 会員西島氏とのメールのやりとりから 3 日・4 日の好天が予想された）、C2 往復による体力消耗と順応の兼ね合い等を総合的に判断し、一日の休養を挟み一気にアタックすることを決めた。

こうして、翌日のアタックを想定して、3 日 C2 にはいった。C2 から見ると頂上は指呼の間、その日のうちに頂上稜線までの急な斜面のルート工作（フィックス 3 本）をしてアタック体制を整えた。4 日は予想通りの無風快晴。6 時に 25 分に C2 を出発、前日のフィックスを使って 1 時間で頂上稜線に到達した。10 時 30 分には頂上から標高差400m に迫ったが、ここからが、最後の正念場となった。60 度を超える壁、場所によってざくざくの氷の下の堅い氷、支点のとれないふわふわの雪、また腰までのラッセル、ナイフエッジ、わずか 300m を登るのにロープ 6 ピッチ、時間にして 4 時間を要した。そして、傾斜が落ちて南側に回りこみおよそ 200m 進むと、その先に私たちの立っているところより高い場所はどこにもなかった。C2 を出ておよそ 9 時間、新疆時間の 8 月 4 日午後 3 時 17 分、青空の下に 360 度の視界が広がり、私たち 5 人は周囲のどの山よりも高い地点で長山協旗、信高山岳会旗、そして山内隊員から託されたミトンを掲げ、初登頂の幸せを噛みしめた。山岳協会の多くの方の応援に、天候も味方にして、帰らざるを得なかった山内も含め 6 人のチームワークで登った山。白い衣裳をまとった端正なヤズィックアグルは私たちにとって、最高の夢の舞台だった。